

実践報告

1 「キャンプ」 卒園記念制作・木版画

深川市・多度志保育園

茶谷 裕樹 (仁宇布中)

十河 幸喜 (江差高校)

福田 好孝 (岩内高校)

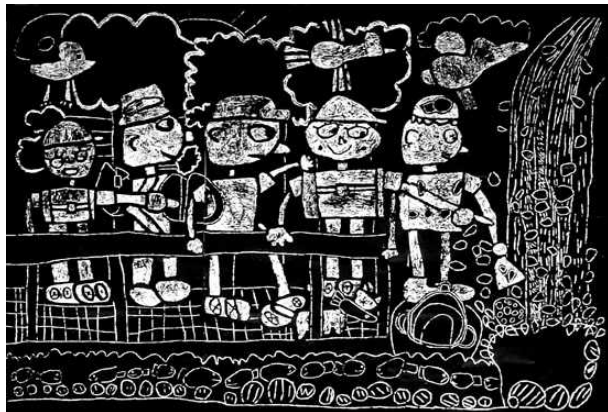
「日本の版画で一番だ。日本の版画は世界一だから、君らの版画は世界一だ」と、園児に言う齋藤 恵氏。(齋藤氏は、多度志保育園・巨大木版画制作の協力者である) 一九八七年の初版から四半世紀、今では園児の中で、制作しなければ卒園できないものとして継承されている。

スタートの年からやや暫くは現在の倍のベニヤ六枚分もの大きさだったという。「園児が少ないから止める」といった時期があったものの小規模化(と言ってもベニヤ三枚)して今日

に至っている。

今年は二人。そして二年目の保育士さんがこの大作に挑んだ。二年前から制作することになっていたという。そう、入園した時からである。画題になるのは常に体験。記憶に残る経験からの制作。作品は毎年、生き活きとしている。報告によれば園自体がグローバル&ローカル、そしてユニークな教育方針や教育活動にもあるという。「火おこし体験」や「天候に関わらず散歩」など、面倒と思われることをあえて行っている。子どもも無限の可能性を引き出す環境を拵えているのだ。よって作品を作らせる目的の体験はさせていない。ちなみに今年のモチーフはキャンプ。

「大人の目指す絵



ではないけない」「表現したいものを保障するのが我々の仕事」と齋藤氏。あえて質の良い道具を用意し、「切れない」と言って彫刻刃を持つて来る園児の道具を再生する。質の良い道具故に彫るものと彫られるものの感触を体感できようもの。彫刻刃の切れ味がわかる保育園児がそこにいる。子どもにとつて版画制作に関わる全て、そして日常の全てが、存在した証明となり、生きてきた証となる。芸術の普遍とも言えよう。

それでも齋藤氏は、「ただ私は、保育士と園児に寄り添うだけ、何を語ればいいのですか、私は園児たちにここに連れてきてもらっているのです」と、語る。

受け継がれる版画は、卒園の証、存在した証明なのである。

2. 「角江重一画集」

小樽市 角江 嘉昭

角江氏は工業高校を定年退職され、自らの辿ってきた足跡から「生きることは、教育とは、学校とは何か」を本分科会に問いかけてくれた。

自らの退職を期に、画家であった父の作品集を自費出版した。その作品集を分科会参加者に「謹呈」と差し出した。作品を撮ったのは写真を趣味に持つ自身である。「私は工業高校な

のでまるつきり畑違い」と言い参加しておられたが「ものづくり」という点では、大きく違えることはない。むしろなずかされる場面がほとんどだ。「出来の良し悪しは、やる気の問題ではなく、技術の問題」という製図。個性を抜いて線を引かなければならないのである。基礎・基本があつて、はじめて、進むことのできよう表現の世界とまさに共通している。製図を行うからといっていきなりCADではない。あくまでも「手書き」



なのだ。五官を使い五感で得させるのである。体感によって基礎・基本を得、自分の想いの工夫がスタートするのである。昨今、簡単に使ってしまう「自分的」とは違う。ものづくりを通して、産まれてくるものは「良いものが良い」と言える気持ちや、そう思える気

持ちを育てる」ことにも繋がろう。個性を抜いても血が通うのである。何故なら、ヒトと関わりながら失敗や厳しさを体験させるからである。

「保管場所もなく絵を捨てるわけにはいかない」から始めた画集づくり。撮影は試行錯誤を繰り返して、デジタルが当たり前の現在に、画を最優先させるために至ったリバーサルフィルム。ここには紛れもなく創り手側の技術と想いが共錯している。

基礎・基本に裏打ちされた表現、小樽に産まれ、小樽で生活をし、小樽の風景を描き続けた画家、角江重一。氏の画集を通して「表現する自然体」「ゆつたりとした時間」をも思い起こされたようであった。

親子の関わり、HEARTIST[®]、語りつくせるものではない。

3. 鑑賞「鑑賞9」〜これも鑑賞?! 技美術室前の廊下から美術館へ

美深町立仁宇布小中学校 茶谷 裕樹

「嬉しい 技・美・理のイ段3段活用・・・」授業ラッシュが嬉しい悲鳴!と本音で語る茶谷氏。毎年のように語ることはあるが、氏の最大の魅力は、とにかく動いた分、取材になっているということ。そこで得た雰囲気や感覚ですら、自分の中

に取り入れ、学校という場所に還元してしまう。氏の許容量は留まる処があるのだろうか。とにもかくにも実証家である。

レポートの一部の画像を掲載した。上は美術室の前の廊下



での展示。下部は理科室前の展示風景である。写真は無いが今

後、部活動での動物の手づくり標本も校内のどこかで展示される。「ああ、コレ使える」と思った新聞の広告ですら展示す

る。実に身近で、取り組みやすいだろう部分からの迫りがある。これら展示には、生徒の活動はもちろんのこと、自分たちの住む「美深」が外れることもない。教科が展示活動で繋がっている。「イ段3段活用」が学校の廊下に形（認め愛）となる。

「学校って、それでいいのだ」と報告から思う。教師側がゆったりとして、その地域だからこそできる活動を生徒と共に行う。そしてみんなで省みる。だから次につながる。残念ながら置き去りになっている現実。このような、極々当たり前なハズの日常を、今年も、茶谷実践から再認識させられた。決して、昔を懐かしんでいる訳ではない。

仁宇布小中学校の生徒のほとんどは地元ではなく、決心し、辿りついた山村留学の学校である。

4. 『自画像』く心を動かす作品く

札幌白陵高等学校 大崎 智尋

人の心を動かす作品づくりを目指す「芸術」の授業である
と、美術の授業の最初に生徒に告げ、確認させる。大崎氏が

こだわってきた「油絵での自画像」の制作で、自己の内面と向き合わせる。

「油絵には描き方なんかない」と言いつつも、下描きからおつゆ描き、グリザイユの下地作りを経て、中描き、仕上げへと基本的な描き方を丁寧に指導し、完成へと導いてゆく。その中で、生徒は時間をかけて作品と、そして内面と向き合っていく。

その作品づくりにより、「自己肯定感の低い生徒の背中を押してあげたい」という、完成に至るまでの過程の中で寄り沿う。大崎氏らしい、真つすぐな生徒への思いと「芸術」への思いが表れている実践である。

五十枚全てのキャンパスを会場に担ぎ込み、「全生徒を連れてきた」行動にも、作品と生徒への思



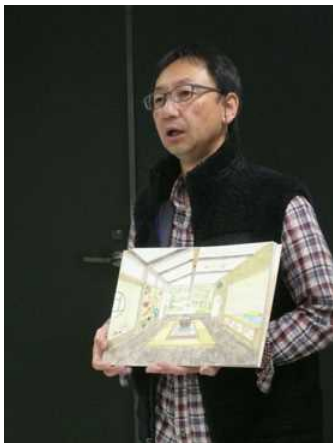
い入れが示されている。

5. 授業(教育)実践を問い直す

(try and error)

鉦路江南高等学校 上野 秀実

まず、実践報告の「一、個人と社会をつなぐデザインへ(美術Ⅰ)」では、従来、一点透視図法を用い「理想の空間」をテーマにインテリアデザインを行なってきたが、自分の部屋が当たり前前の現在、理想の在り方そのものを、時代と照らし合わせ再検証し、「希望をかなえる空間をデザインする」と更新した。



更に大震災以来見直されつつあるコミュニケーションにも目を向けられるように、課題を一点透視による室内空間または、一点透視による建築物とし、生徒が選択できるような時事的要因による変更も加えた。

「二、再発見、日本文化!(美術Ⅱ)」

ア 揉み紙にアスバラを描く(日本画)の実践では、構成の難しい細長いアスバラが、揉み紙を使うことで、日本画の特徴の一つである「間」を生かした表現につなげている。更にトミングすることで、より間の表現を極める。和紙の特長を活かしつつ、膠など消えつつある画材はためらうことなく代用品を用

いて補う。

イ 創作和菓子(立体造形)では、和菓子職人を講師に招き、紙粘土で実演してもらう。

というユニークな実践。

季節や客層で材料の配合を変える気配りなど、日本人が持



つ精神性や、自然観、端正な手仕事に触れられる大変貴重な経験は今後も研究する価値ありとのこと。

上野実践の凄さは、時代を的確に捉えたうえで、どのような力を付けさせるか「確かなねらいをきめ細かい手立てで実現させる点」にある。しかも時代の流れを「柳に風」のごとく受け流すが、時に絡め取る柔軟性と強靱さも兼ね備えている点にある。学ぶべきことが多い。

6. 「2013・毎日の授業実践から」

岩内高等学校 福田 好孝

「美術教育を大切にし、学校教育の中で美術教育を守っていただく、美術教育で真の生きる力をつけられると信じて、微力ながら実践を続けてきて36年目。いよいよ最後の年になってしまった・・・。」レポートの巻頭言である。信念であろう。過去、本分科会に於いて持参する生徒作品群は、どれを観ても「しつこく描き込んでいる」のだ。語弊があるかもしれないが「上手いとか下手とか」ということばでは語れない。描き込んだ分、ものに迫り、作品が観る側に語りかけるかのようでもある。「労作≡秀作」ということばがふさわしい。そ

こに至るまでには「見させる」「描かせる」という身につけなければならぬ基礎的・基本的な取り組みを地道に行っているのだ。そういった裏づけがあることをわすれてはいけない。更には制作を続ける中で自然とやりだしている「子どもにも変容する。そこに描くものと描かれるものの抵抗感(感触)を楽しみながら(自ら工夫)制作を進めることのできる画題設定を企てる。ここには「制作を進める中で自らが獲得していくのであるう表現をも視野に入れて」美術教育の根幹を成す、発達を保障することにもつながっているのである。

必要最低限に見通しを持たせる、手書きの教科通信ART JOURNALを配る。案内過多であるとむしろ不自由になるだろうか、表現の幅を狭めないように「あえて」言い過ぎないのである。ここには生徒の現状と今後とい





接していなければ、決してできるものではない。「教える側あるべき姿勢」を自問自答(考)しながら実践しているのである。

最後にレポートの行を紹介する。

「美術の経験が少ないので子どもたちが描けないと嘆くよりも、その状況に応じてしっかりと教えることが大事」との指摘は、今でも肝に銘じている。「勉強しないからできない」ではなく、「小学校、中学校で十分やられていないからできない」ではなく、「生徒の意識が低いからだめなのだ」ではなく、「学校でここまでやらなくてよい」ではなく、教員の立場(上から)の視点を捨て、子どもたちを支えていく視点に変えていくことが求

う、常にバラを見ながら授業を進めているのだ。ひとりひとりと細かく

められていると思う。

7. 「焙煎 幸場」

江差高等学校 十河 幸喜

十河実践の真骨頂を示すレポートタイトルである。いつものがらの独特な文章表現と語り口は魅力である。しっかりとした信念のもとに、大切にしなければならぬことは何か、「真の生きる力」を子どもたちに伝えようと体当たりで実践されている。



「焙煎」は、《技術の獲得、その環境の醸成》であろう。「幸場」は、《人間の成長、心の成長を確認させる教室》であろう。レポートタイトルの意味するところは大変深い。

実践は、ベーシックデザインである。素材は、あえてポスターカラーにこだわっている。色彩の学習から

始まり、素材の使用方法、基本的な図案から段階的に複雑に発展させる。時間をかけての粘り強い追求である。しかし、子どもたちはさらに追求の姿勢を高めていく。指導者と子どもたちの静かな闘いが続いていくのである。相乗効果と言って良いのである。作品はどれも精緻な美しいものに仕上がっている。「技術で教える」ことに成功しているのである。

「技術を教える」「技術で教える」このことはこの分科会で長く大事に論議されてきた研究課題でもある。技術を教えるだけで良いのか。技術で教え伝えられることは多様ではないか。基礎的な基本的な技術を教えることは重要である。それを教えることでさらに獲得させることは何か。さまざま論議してきたのである。十河実践は、その課題を乗り越えようとしていると感じる。いや、乗り越えた実践であろうと思う。